

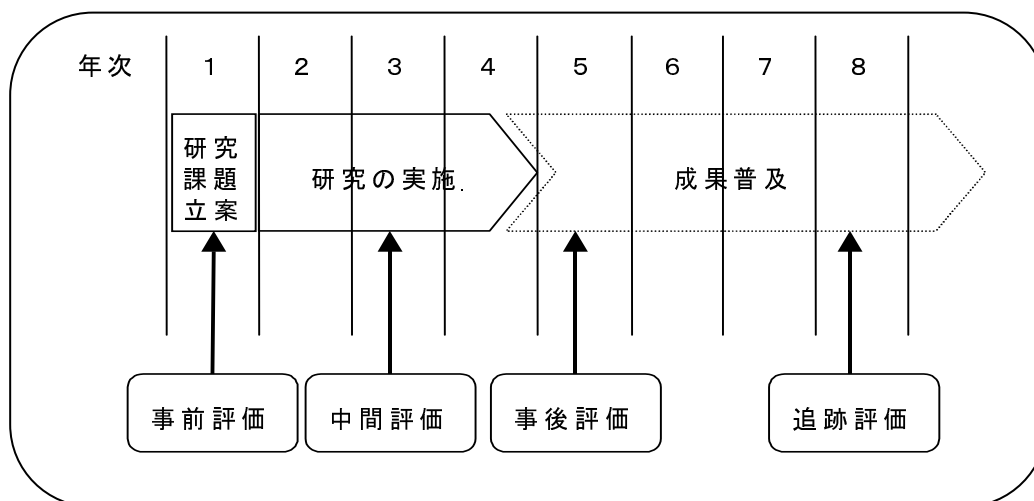
平成20年度追跡評価結果

1 概要

研究開発を行った場合、その成果が社会・経済などにどのような影響を与えたかが最も重要になってきます。また、一般に研究の成果が社会に普及するには一定の期間が必要となります。

このため、総合技術研究所では、研究終了後3年を経過した時点で、研究成果の活用状況や波及効果等について、追跡評価を行っており、県民への説明責任を果たすとともに、研究開発の企画・立案機能の強化や成果移転などの効果的な推進に活用しています。

評価時期のイメージ図



【評価結果概要】

平成20年度は、平成16年度に終了した17課題を実施し、結果は次のとおりでした。

評価区分	内容	課題数
S	研究成果が十分に活用され、効果は当初見込みを上回っていると認められる。	0
A	研究成果が活用され、効果は当初見込みをやや上回っていると認められる。	3
B	研究成果が活用され、効果は当初見込みどおりであると認められる。	8
C	研究成果の活用が不十分で、効果は当初見込みをやや下回っていると認められる。	5
D	研究成果の活用が不十分で、効果は当初見込みを下回ると認められる。	1
計		17

また、総合評価において、研究成果が活用され、効果が当初見込みどおり若しくは上回っていると認められた研究課題の概要は、次のとおりです。

総合評価結果	センター	課題名	成果の活用状況	研究期間(年度)
A	保環C	食中毒及び人畜共通感染症に関する疫学的調査	食品などの中毒起因菌と、下痢症患者株との関係を比較解析することにより、食中毒菌検査の迅速化や原因究明に寄与しました。	H14-16
	保環C	カキのノロウイルス浄化のため迅速定量法開発に関する研究	生食用カキによるノロウイルス食中毒の未然防止のため、ノロウイルスの迅速定量法を研究し、その後の研究で、生産現場で使える技術を確認しました。(P2, 3参照)	H14-16
	水技C	広島かき養殖種苗安定確保に関する研究	かき養殖種苗について、餌の量や干出時間の違いによる稚貝の成長生残の変化をモデル化し、採苗後から筏に本垂下した直後までの適正な管理技術を確認しました。	H14-16
B	保環C	ダイオキシン類による環境汚染の実態とその原因解明に関する研究	ダイオキシン類による汚染原因の究明のため、実用的迅速分析法を開発し、汚染源の特定及びその寄与割合を推定する解析手法を確認しました。	H14-16
	保環C	廃棄物二次資源の安全性評価に関する研究	廃棄物二次資源として有効利用が期待される溶融スラグについて、一般環境中での長期環境安全性を評価するための手法を確認しました。	H14-16
	西部C	マイクロマシーニングによる高温用センサの開発	ダイヤモンドの合成技術と微細加工技術を組み合わせることにより、高温でも使用できる圧力センサ、振動センサを開発し、製品化に活用されました。	H14-16
	東部C	高精度光応用計測技術の開発	精密部品の形状を高精度に検査するため、光応用計測技術を確認し、特に光触媒コート膜厚を計測する光干渉計測技術は製品化に活用されました。	H13-16
	農技C	特産作物ウイルス病等の診断技術の開発	ワケギやカンキツの病原ウイルスの検査法を確認するとともに、現場での指導者等を対象としたウイルス性病害感染防止マニュアルを作成し活用されました。	H13-16
	畜技C	体外受精胚の凍結保存技術の検討	牛体外受精胚の凍結保存技術を確認し、生産コストが半減するとともに生存性、受胎性が大幅に向上した。この技術で全国初のクローン検定の実現につながりました。	H14-16
	水技C	定着性魚類種苗生産技術開発	オニオコゼについて、仔魚の浮上へい死防止と希釈海水を用いた種苗生産に成功しました。ナガニシでは、産卵生態を解明し、全国に先駆けて種苗生産技術を確認しました。	H14-16
	林技C	植生の自然回復困難地における森林造成支援技術の開発	広島県沿岸部で発生した山火事の跡地を対象に、衛星リモートセンシング技術を活用した自然植生の回復予測技術を開発し、実際の治山事業に活用されました。	H14-16